

製本のススメ

Vol. 174

オリンピックイヤーの2020年はどんな一年になるのでしょうか。働き方改革法は動き出しますが休みは増えても個々の意識が変わらなくては、逆に休めない人たちが増えそうな気がします。それにしても、暖かい冬 温暖化も心配です。

今回は**紙厚**の話しリターンズ

表紙や本文に使う用紙を決めるのは、意外に難しいものです。まして見本帳で触った感触が良くても、印刷や製本に向かない用紙の種類や厚みは沢山ありますね。これは作れない 壊れる等ダメ出しされた経験のある方も多いはず。使い慣れた用紙であってもその用途によっては不向きな場合があり 後加工をどうするのかという視点も、企画段階で読み込む必要があり、またその知識は多少でも印刷に関わる方々には、知っていてほしいものです。

最近では1冊のページ数が少なくなり上製本であっても50頁に満たないものが多くなってきました。無線綴じであってもページの少ない冊子が多くなり束厚が1ミリ確保出来ないものもあります。表紙クルミ機械の性能も良くなりましたが、それであっても1ミリでは綺麗に糊が付きません。また背の接着剤の厚みが本文の厚みより勝り **仕上げ断裁加工に不具合が出ます**。

紙を厚くすれば良いかといえ、一概にそうでなく特にA6のような小さいサイズや、A4横のような大きいサイズでは、**用紙の厚みが顕著に現れます**。いつも使い慣れている用紙厚みであっても、**版型が小さければ硬く感じ 逆に大きければ、薄く感じます**。手に取った時の感触は大切です。

同様に表紙用紙も 厚くて加工できない・薄くて機械加工が難しいなどの不具合がでます。特に本文の束厚が薄いと表紙付けは困難です。PP加工が加わる場合などは、表紙の紙厚を下げる等して調整することも必要ですね。

印刷が出来るから製本もできる紙厚とは限りません。折り曲げたり 貼り合わせたりする事を想定してください。次回は失敗を招く紙選びのお話しです。



Tea break

今年はオリンピックが開催されるため、多くのイベントが日程や場所の変更を余儀なくされますが、その為か年明けから何となく追われている感のある仕事の流れです。もしかすると年度末の繁忙期は早まるのかな?と予測しています。1月ですが既に3月後半の予定が入りつつあり、いつもと違う仕事の流れに少々戸惑っています。発注や予約はお早目をお願い申し上げます。

弊社 HP は www.isekiseihon.com

facebook は 「井関製本の日々」

by (株) 井関製本